

新刊紹介

佐藤百合・大原盛樹編『アジアの二輪車産業―地場企業の勃興と産業発展ダイナミズム』

佐藤百合



アジア経済研究所
2006年

自動二輪車（オートバイ）は、アジアの発展途上諸国で庶民の「生活の足」として活躍している。二輪車の修理や組立ては、途上国の人々が工業技術を学び、近代工業に参入していくきっかけになることも多い。途上国の買い手にとっても作り手にとっても、ごく身近に感じられる存在なのが二輪車である。

それゆえに、二輪車産業には四輪車産業とは少し違った特徴がみられる。たとえば、二輪車産業は一国経済の発展途上の一時期に急激に市場が膨らむ局面が現れる、いわば途上国型の産業である。その一時期に、

産業発展のダイナミズムを凝縮的に観察することができるのである。さらに、途上国の地場企業に注目するならば、先進国企業に初めは依存し、そこから多くを学習し、しかしやがては自立し、対抗し競争しようとする地場企業の成長プロセスが浮かび上がってくる。

本書は、これまで四輪車に比べて注目度の低かった二輪車を産業研究の対象に取り上げ、アジアの産業発展ダイナミズムの側面を二輪車産業という切り口から描き出そうとしたものである。

世界の二輪車市場で圧倒的な支配力を誇る日本の二輪車メーカーがこの産業の主役であることは紛れもない事実だが、本書ではアジア各国の地場企業をもう一方の主役に据えている。独自の発展に向けてチャレンジする地場企業の実態と方向性を明らかにし、そこから産業発展のあり方を捉え直す、というのが本書の基本的な視角である。研究対象として取り上げたのは、日本、台湾、中国、インド、タイ、インドネシア、ベトナムである。

第一章は、二輪車産業からみた産業発展論を試みている。現在のグローバル化のなかでは、テンポの速い技術革新、国境を越えた最適分業を追求する、先進国企業主導の産業発展パターンがもたらす注目されている。しかし、二輪車産業はこれとはむしろ対照的である。各国の地場企業が国内市場をベースに成熟技術の

地道な積み重ね型革新によって知的資産を蓄積し、先進国企業に対抗しうる能力を構築していく企業成長、産業発展の経路を、本章は提示している。

第二章と第三章は日本を扱う。日本の完成車企業を分析した第二章は、その支配力の源泉として、日本本国における産業資源の蓄積の厚み、進出先市場への適応能力の高さの二点を指摘している。一方、日本の部品サプライヤーを論じた第三章は、納入先である完成車企業の技術掌握度が高いために、高いOCD（品質・コスト・納期）能力を持ちながらも設計・開発能力を養う機会が少ない部品企業の限界を描いている。

続いて、地場資本の完成車企業を輩出している台湾、中国、インドを取り上げる。第四章は、台湾の地場完成車企業の技術的自立、海外展開での挫折、その克服の過程を追っている。第五章は、模倣競争と不安定な分業関係に特徴づけられた中国の二輪車企業が、開発能力を向上させ規律ある分業関係へと変貌していく様子を分析している。第六章は、インドの地場完成車企業が共同開発を通じて部品サプライヤーの能力向上に大きなインパクトを与えてきたことを実証している。

東南アジアでは、日系完成車企業の主導で二輪車産業が形成されてきた。第七章は、日系企業が多数進出しているタイで、地場企業が擬似日本的取引のなかでOCD能力を高め

ていく実態を描いている。第八章は、同じく日本ブランド寡占市場のインドネシアで、近年の市場の急拡大が地場部品企業の能力向上、産業基盤の拡大を促した点に注目している。第九章は、新興市場のベトナムにみられた地場組立企業の一時的勃興が、地場部品企業の参入や技術習得を促進したと分析している。

本書の各章は、以上のような各国各様の特徴を綿密な企業調査にもとづいて実証的に明らかにしている。と同時に本書は、各国の違いを統一的に理解することを試みている。すなわち、一国における産業資源の蓄積の度合いと国内市場の特性が地場完成車企業の競争力の高さと個性に反映されてくること、そして、完成車企業との取引関係のあり方が部品企業との能力形成に大きく影響することである。日本の完成車企業と取引する部品企業は、ものづくりの基礎であるOCD能力を鍛錬される一方で、製品開発能力の獲得は制約される。むしろ地場完成車企業との取引や四輪車部品などへの進出によって、開発能力の獲得機会が生まれるという現象が各国にみられる。

二輪車産業における途上国企業のチャレンジは、現在ますます活発化している。本書を一つのステップに、二輪車産業研究、さらには発展途上国の産業研究が今後さらなる深まりを見せることを期待する。

（さとう ゆり／アジア経済研究所地域研究センター）